

藤市は娘を「女寺へも遣らずして筆の道を教へ」とあるように、「女寺」すなわち女子用の寺子屋へは通わせず、自ら教育を施していたわけであるが、この点について、長友氏の興味深い記事がある。¹²⁾

『嫁娶重宝記・三』（元禄十年、一六九七）には、寺入りする日は、身代（資産）にもよるが、赤飯を蒸し、樽肴を添え、金子百疋、二百疋を紙に付け、親同道で師匠の方へ行く。机文庫を持参して、初めて師匠が手を取って教える。

この記事から、ある程度の金銭を支払うことで女子が指導を受けられるという様子が伝わる。これが一般的な親が子へする教育であったのだろう。このことをふまえて藤市の取った行動を考えてみるに、赤飯や樽肴を準備し、金子をわざわざ支払うという「無駄」を省くという合理化が、すなわち直接娘を教えるという行動につながるといえるのかもしれない。ここだけ読めば、教育費を節約する親のように思われるが、嫁入り道具の屏風を捨てるなど、金をかけるところには掛けており、決して教育費を節約しているわけではないのである。

藤市の儉約ぶりを描きたいのであれば、儉約方法に徹して描ききればすむにも関わらず、『古今犬著聞集』には見られない藤市の別の側面について、娘への教育という一点から描き出したことに注目すべきではないだろうか。そして、藤市の教育によって京一の賢い娘へと成長させ、父親を見習ってより儉約に励む娘として描かれる。これはいわば西鶴の考えた新しい女性の生き方だったのではないだろうか。

小結

本稿では、「世界の借屋大将」の中に描かれる藤市の娘への教育法に着目した。当時の女訓物との比較を試み、当時流布した女訓物の考

え方を踏まえつつ、西鶴なりの新たな女性像を提示していると考えた。親に従な態度を取る娘というわけではなく、自ら考え、新たなたずまいを身に付けた、新しい女性の型を提示したのではないだろうか。今後さらに他の女訓物等を詳細に調査した上で考察する必要があるろう。

本文の底本は、『新編日本古典文学全集 井原西鶴③』（小学館）を使用した。

〔注〕

- ① 西鶴研究会編『気楽に江戸奇談 RE・STORY井原西鶴』（笠間書院）二〇一八年
- ② 堀切実訳注『新版日本永代蔵』（角川ソフィア文庫）二〇〇九年
- ③ 『新日本古典文学全集 井原西鶴集③』（小学館）一九九六年56頁脚注参照。
- ④ 『仮名草子集成 第二十八卷』（東京堂出版）二〇〇〇年
- ⑤ ②）に同じ。
- ⑥ 矢野公和・有働裕・染谷智幸訳注『日本永代蔵』（講談社学術文庫）二〇一八年
- ⑦ 架蔵本
- ⑧ 江森一郎『江戸時代女性生活図大事典』（大空社）一九九四年
- ⑨ 長友千代治校注『女重宝記・男重宝記』（現代教養文庫）一九九三年
- ⑩ 長友千代治『江戸庶民の読書と学び』（勉誠出版）二〇一七年
- ⑪ ⑩）に同じ。
- ⑫ ⑩）に同じ。

には「女の覚へてよき事を書き集め」たとあり、女の嗜み（巻一）、祝言（巻二）、懐妊・子育て（巻三）、諸芸（巻四）、女節用集字尽（巻五）と女性の学ぶべきことを網羅しており、従来の「女訓書」の身嗜・躰中心から、元禄期の知識中心の内容に変わっている。巻四には「手習ひの事並に文書く事」があり、「女中の芸の第一は手書く事」とある。女文字のいろはを書き覚えると、無智の女も歌や草子を読んで昔のことを知り、文章を連ね、男文字（漢字）も覚えることになる、と説いている。

次に、『女重宝記』の中から『源氏物語』『伊勢物語』関連の記述を抜粋してみると以下の通りである。

一之巻

女中たしなみてよき芸、あらまし書つけ侍る。

手書く事 歌よむ事 歌学する事 源氏・伊勢物語、百人一首、古今・万葉の義理をしること

四之巻

二 歌を詠み習ふ事

一、伊勢物語は、業平伊勢の国へ狩の使ひにゆき、齋宮を侵したる事、そのほかいとなまめける女を垣間みたる事など書たる故、伊勢物語といふなり。又伊勢といふ女が書たる物語なる故いふ、と云説もあり。

一、源氏物語は、紫式部といふ女房、江州石山寺に籠り、観音に祈りてつくりし物語なり。

一、百人一首は、定家小倉山に住みて、山庄の障子に、色紙に書給ふ百人の名歌なり。

右は女のもてあそぶ草子なれば、作者をしらしむるなり。

『女重宝記』でもやはり『源氏物語』や『伊勢物語』を良しとしてはいない。先の長友氏は、この点に関して「町娘の読書」と題して興味深い指摘をしている。^①

読書は江戸時代中期以降にもなると生活の中であり、読者は自ら糸を繰り、縫い物をするような中流以下にも広がっていて、読本は一層啓蒙、教訓、実用的な本になっている。古典の伊勢、源氏などは淫乱心を起こすので好色本となり、読んでほならぬ本となる。ただし、その伊勢物語や源氏物語が、笑本に比べて何のことはないことは分かり切っている。それでもなぜ好色本なのか。実際に、伊勢、源氏を読み通した者は数少ない筈であり、話に聞いてその場面が増幅されていとも解釈される。そうすると文字が読めるようになった町娘がいて、『源氏物語』を読むと淫乱心を起こすことになるというのは、もつともな事になる。

貞享五年（一六八八）の『日本永代蔵・二・一』には、娘の嫁入り屏風を拵えるのに、「洛中尽しを見たならまだ見たことのない所を或る来たがるであろう。源氏、伊勢物語の絵は心が淫乱になるであろうと考えて、多田の銀山の出盛りの様子を描かせた」とあるように、問題は文学世界、作品世界へのあらぬ過剰な連想があったのではないか。読書はそれほど広がっていたと見てよい。

先の引用から、当時、女性達は教育の機会が限られていたとはいえず、草子類を相当数読みこなしていたことになる。藤市の一人娘も、長友氏の指摘通り、「源氏物語」「伊勢物語」の意味が分かってしまうため、屏風絵にしなかったという解釈が成り立つだろう。それほどの読解力を藤市自身が指導したということである。

卷二―「世界の借屋大将」は、「ひたすら致富を願う人間の生きざまを、藤市の処世の在り方を通して描いているところには西鶴の鋭い人間認識の目が光っている」^⑤。「実在のモデルに依拠して新しいタイプの儉約家を造形し、同時にこれを劇画化したのは、生きることに対する西鶴の深い洞察による虚構化であった」^⑥などと評されてきた。

しかし、新たに着目すべきは藤市の娘への対応ではないだろうか。なぜ、娘とのエピソードを話の中に描き込んだのか。娘とのやりとりを通して儉約家・合理的な藤市像を浮かび上がらせるためであるとも解釈できようが、それにしても、なぜ『古今犬著聞集』にあるような冷淡な藤市像ではなく、一人娘を気に掛ける愛情深い藤市像にしたのか。特に教育の在り方でその愛情深さを表現している点について考える必要があるだろう。

三 女訓ものにみえる女子教育

江戸初期にみられる女子教育に関する教訓書類には『女実語教』『女重宝記』等がある。『女実語教』に見える女性の教養について、序文に以下のような文面があるので引用する。^⑦

人の子の中に、男子は師をとりて学文をつとめさせ、家をととのへ、身を治める道ならばしむるもあれど、女子に至りてはをしゆる人もまれなり。

とある。男子には師を迎えて教育を受ける機会がある一方、女子にはその機会に恵まれない旨記されており、当時女性が教育を受ける機会が限定されていたことが窺える。さらに本文では、女性が身に付けるべき教養、例えば読書や手習い、和歌、音楽・縫い物が取り上げられ、

とくに裁縫を重視していたことも記され、女性の教養という意識が高まっていたことも明らかである。

「世界の借屋大将」の中で、藤市が娘のために拵えた屏風絵に「伊勢物語」や「源氏物語」は浮気心が出るので描かないと記している。当時、女訓ものの書籍類では、『源氏物語』や『伊勢物語』はどのように拵えられていたのだろうか。江戸時代初期頃の女子教育はどのようなものだったのかを知る上でも、管見に入ったものからいくつか例を挙げておきたい。『増益女教文章』^⑧には次のように記されている。

……かだましき女は、いよくふるき事を見き、して心をなをし、其中にいろをこのむ文などあまた取あつかひ給ふ事よろしからず。其ゆへは、しゆにいろへばあかくなり、すみにちかづけばくろくなるごとく、みたり成事を見き、すれば、かならず其心につりもてきて、身の程はぢに成也。『源氏物がたり』などは、二世あんらくの事をしるし侍るといへども、いたらぬさうしとぞある人いへりける。其外、みだり成物を見給ふべからず。ことに殿にみせまいらせるまじ。

先の引用を見ると『源氏物語』などは男に読ませない方がよいと説いているのが分かる。

次に『女重宝記』^⑨を取り上げる。『女重宝記』については長友千代治氏が以下のような説明をしているので引用しておく。^⑩

江戸の庶民教育は、男子だけでなく女子にも同様に行われていた。庶民啓蒙書に先鞭をつけた苗村丈伯には元禄五年（一六九二）に『女重宝記』があり、一年遅れで刊行された『男重宝記』は、『女重宝記』の好評による発販であった。（中略）『女重宝記』の序文

うになる。

① 屋敷の空き地には柳・柊・樺葉・桃の木・花菖蒲・数珠玉などを植えていた。

② 葭垣に生えかかった朝顔がつまらないと全て刀豆に変更した。

③ 嫁入り屏風を拵えた際、多田の銀山の最盛期の絵を描かせた。

④ 女寺子屋へは行かせず、藤市が手習いを教え、京で一番賢い娘となった。

⑤ 親の儉約を見習い、節句の遊びや盆踊りもせず、身の回りのことは全て何でも自分で行い、女性の嗜みである縫い物も見事に仕上げた。

ここでは、合理的な藤市が、娘の教育に対しても独自の方法論を元に娘に教育を施し、見事に成果を出している。①屋敷の空き地に植えた植物は全て実用的に使用できるものばかりである。②では朝顔を食べられる「刀豆」に植え替えるところも儉約家の藤市らしい。

さらに③では、嫁入り道具の屏風の挿し絵について言及しているが、京都洛中の絵では見えない場所へ出かけたくなり、「源氏物語」や「伊勢物語」の絵では浮気心を起こすから多田銀山の絵を描かせるといふ。その後④⑤と続くが、特筆すべき点は、④の藤市が娘を女寺子屋へ行かせず、自ら教育指導を行った結果、とても賢い娘に成長した点である。

次の章では藤市に関する先行資料を踏まえてみる。

二、先行資料の中の藤市と娘について

モデルの藤屋市兵衛についての先行資料は、三井高房『町人後見録』と椋梨一雪『古今犬著聞集』がある。『町人後見録』には、手代から独立し、知り合いから銀を借りて長崎商いをしていた藤屋市兵衛の商

売人としての敏腕ぶりと儉約家の様子が記されるにとどまり、娘についての記載は全く見られない。一方『古今犬著聞集』には、藤市のエピソードの中に、娘についての記述は少しだけ見えるので、次に引用する。

藤屋市兵衛か事⁴

一室町御池町藤屋市兵衛ハ、朝夕の火を焼より外にハ、湯茶もわかさず、咽のかわく時ハ、隣家に行て吞つ

髪も、五日六日に一度ツ、ゆわせ、夏ハ、かたひら一つを、あらひかへして、着かへも持侍らす、冬ハ、もめん布子の古き、二ツ三ツの外はなし

くふ物とて、黒米飯に糠味噌汁、焼塩の外は、そへず独娘のあなりしを、下女奉公させしかハ、心をうしとて、三十余才にて首をく、りて死ぬ、其をも哀とやハおもふ去程ニ、一代千七百貫目の分限に成て死ぬ

拙き哉、金銀を積置、つかふことなくハ、瓦礫に同じ、嗚呼無慙也、餓鬼の苦患、此世にうけて、末世、猶、哀に社侍れ、平左衛門、市兵衛か志、過不及のたかひ、かたはらいたく侍る

この部分を見てわかる通り、西鶴作品との相違点は明らかである。堀切氏は西鶴の作品を「その単なるケチとは異なる、いかにも合理的な行動を、いささか誇張し、滑稽化して描いている」とし、『古今犬著聞集』のように「徹底した吝嗇家として描かれているのは異なっている」と述べる。

また氏は『古今犬著聞集』に藤市の一人娘への愛情は記述されず、娘が心を病み、自死した際も「哀とやハおもふ」という態度であった点についても明らかな相違と指摘する。

一 藤市の教育について — 本文の描写の意味 —

『日本永代蔵』という小説は、当時の経済界の話であるが、実は「庶民の学び」についての描写も見られる。例えば巻一の三「浪風静かに神通丸」では、次のような丁稚教育の描写がある。

大和・河内・津の国・和泉近在の物づくりせし人の子供、惣領残して末々をでつち奉公に遣はし置き、鼻垂れて手足の土気おちざるうちは、豆腐・花油の小買物につかはれしが、お仕着二つ・三つ年をかさねけるに、定紋をあらため、髪の間振を吟味仕出し、風俗も人のやうになるにしたがひ、供ばやし・能・舟遊びにもめしつれられ、行く水に数かく砂手習・地算も子守の片手に置き習ひ、いつとなく角前髪より銀取りの袋をかたげ、次第おくりの手代ぶんになつて、見るを見まねに自分商を仕掛け、利徳はだまりて損は親方にかづけ、肝心の身を持つ時、親・請人に難儀をかけ、遣ひ捨てし、金銀の出所なく、そのなりけりに内証扱ひ済みて、荷ひ商の身の行末、幾人かかぎりなし。おのれが性根によつて、長者にもなる事ぞかし。

これは丁稚奉公に出た者の例である。農家の子ども達が髪のかい方から手習いの方法、計算の仕方など、どのように学んで身に付け、丁稚として成長していったのか、当時の「学び」の一端を垣間見ることが出来る。「学び」の様子が描写されるといふことは、庶民への学びが浸透していたことを示すものである。

「世界の借屋大将」には、藤市の娘に対する教育方法が描写される場面がある。儉約家の藤市には一人娘がおり、藤市なりの娘に対する愛情が注がれている場面ともいえる。次に引用する。(傍線部は筆者

による。便宜上番号も附した。以下同じ)

①屋敷の空地に、柳、柊、樺葉、桃の木、花菖蒲、薏苡仁など取りまぜて植ゑ置きしは、ひとりある娘がためぞかし。②よし垣に自然と朝顔のはえかかりしを、「同じ詠めにははかなき物」とて、刀豆に植ゑかへける。何より我が子をみる程面白きはなし。③娘おとなしくなりて、やがて嫁入屏風を拵へとらせけるに、「洛中尽しを見たらば、見ぬ所を歩きたがるべし。源氏・伊勢物語は、心のいたづらになりぬべき物なり」と、多田の銀山出盛りし有様書かせける。④この心からは、いろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。⑤親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよこさず、節句の雛遊びをやめ、盆に踊らず、毎日髪かしらも自ら梳きて丸曲に結ひて、身の取回し人手にからず、引き習ひの真綿も着丈の豎横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。折ふしは正月七日の夜、近所の男子を藤市かたへ、「長者になりやうの指南を頼む」とて遣はしける。座敷に灯かかやかせ、娘を付け置き、「露路の戸の鳴る時しらせ」と申し置きしに、この娘しをらしくかこまり、灯心を一筋にして、もの申すの声を、元のごとくにして勝手に入りける。

「何より我が子をみる程面白きものはなし」とあるところから、藤市の娘に対する向き合い方が伺い知れる。堀切実氏は、「藤市の一人娘に対する独特の厳格な教育法にもそうした藤市イズムが徹底して表れている。」と述べている。²⁾

先に記された一人娘に対する藤市の教育方針を整理すると以下のよ

『日本永代蔵』 試論―卷二の一「世界の借屋大将」にみる女子教育

松村美奈

(キーワード)

井原西鶴 女子教育 女重宝記 町人 元禄時代

(要旨)

「世界の借屋大将」は、実在の人物である藤屋市兵衛をモデルに、合理的な生き方を描き出した話である。藤市の始末・儉約に徹底した生き方が注目されることが多い。しかし本稿では、藤市の一人娘への教育という視点から再考を試みた。厳格な教育法は藤市の愛情であり、当時の女子教育を踏まえて(または揶揄して)いるものと考えられる。こうした女子教育の場面をあえて入れ込むことで、新しい女性の生き方を提示しようとしたのではないか。

はじめに

『日本永代蔵』は、経済小説の先駆けといわれる作品である。大坂が日本の商業資本主義の根拠地となり、金銀に翻弄される人びとの行き方を取り上げ、町人生活を活写した。副題にも「大福新長者教」とあるように、いかにすれば富豪となれるのかを例にあげながら紹介している。特に卷二―「世界の借屋大将」は、究極の節約により分限となるまでの様子を描いたものである。主人公の藤市が、親の遺産を頼ることなく、自分で金を貯めていく過程を描いている。

以前、この話をリライトした事がある⁽¹⁾。その際、主軸を藤市の娘に置き、自由に書き換えた。特に注目したのは、藤市が娘に対してどのような教育を施しているのかという場面であった。この一篇を通して「教育」という視点から話を読み解くことで、西鶴の生きた時代の女子教育について検討してもよいのではないかと考え、今回取り上げることにした。

(1)